

〔研究ノート〕

大河ドラマのマスコミ社会学的批評

前 田 崇 博

はじめに

「時は今天が下知る 五月哉」。2020年、東京で2回目のオリンピックが開催される年、NHKの『大河ドラマ』は「麒麟が来る」である。主人公の明智光秀は、この大河ドラマで数々の俳優が脇役として演じたことにより少しずつ評価が高まっていった。半世紀以上かけて逆賊から英雄にまで成長したことになる。冒頭の句は光秀が本能寺奇襲を決意した時のものである。光秀という人物はこの大河ドラマで様々な性格付けがされ歴史的評価も変わった同番組のいわば育成キャラクターでもある。演じる長谷川博己氏も同局ドラマ出演を機に知名度の上がった俳優である。同番組59本目にして初の育成素材の融合を機軸に据えた方法論による作品といっても良い。

一方、社会学的に見ればこの作品は「アンチ・ハラスメント」がテーマであると断言できる。昨今、スポーツ界においてパワーハラスメントが注目され、専制君主的なリーダーが告発されていった。それも見事なまでの選手側の勝利である。このような爽快なリベンジのニュースは、虐げられている人間にとって共感・共鳴だけでなく、社会変革のムーブメントにも繋がってきている。「本能寺の変」という日本史における最大の下克上、復讐劇を自分の境遇とオーバーラップして今から期待する視聴者は多いことであろう。

大河ドラマが60年近く支持されてきた背景には、NHKの綿密な意識調査と分析力の賜物だと考えている。受信料で成立している放送局だけに国民のニーズやディマンドを詳細に把握されていて企画されていく姿勢は素晴らしい。スポンサーの意向を無視できない民放各局とは違うドラマが製作できる環境にある。そのため、社会世相、事件、流行、文化等の現在進行形のエッセンスが内包されることが多い。社会学の要素を抽出・分析するためにも非常に有用なコンテンツである。

本稿では、大河ドラマの変遷とそこに込められた社会的メッセージを紐解きたい。

特に今回は主人公やそれを演じる俳優の傾向分析等に焦点を絞って「研究ノート」として論述する。大衆文化から国民の求める「英雄像」の変遷史に繋げるのが目的である。なお、俳優諸氏には「氏」を付記するが、歴史上の人物においては論文作成の通例上、敬称略の形式を採用している。

1. 大河ドラマが育成した英雄

本ドラマの描写の仕方によってその歴史的評価が高まった人物は数多くいるが、その代表格は明智光秀を含めて3人である。他の2人は坂本龍馬、石田三成である。為政者でないため、教科書で

は重用されない人物でもある。

まずは坂本龍馬。司馬遼太郎氏の原作の『竜馬がゆく』(1968年/北大路欣也氏主演)で俄然坂本龍馬の知名度が上がった。明治維新三傑と違い、脱藩浪士という生活歴が低評価となっていたと思われる。脱サラのいわばニートのな生活者でもある。しかしながら、この放映時期は東京オリンピックと大阪万博の間の非常に国際化が加速している時代でもある。今で言う、グローバルな主人公像が大衆人気と結合したと思われる。また、学生運動の反体制的なムーブメントと幕末浪士達の志が融合したものなのかもしれない。

このドラマで主演を演じた北大路氏以降、坂本龍馬役は継続して人気若手俳優が演じることになる。

具体的には藤岡弘氏(『勝海舟』1974年)、夏八木勲氏(『花神』1977年)、佐藤浩市氏(『翔ぶがごとく』1990年)、江口洋介氏(『新撰組!』2004年)、玉木宏氏(『篤姫』2008年)、福山雅治氏(『龍馬伝』2010年)、小栗旬氏(『西郷どん』2018年)等である。推定身長177cmの龍馬のイメージを踏襲する長身イケメン俳優が連なる布陣である。『竜馬がゆく』と『龍馬伝』以外、坂本龍馬自体は脇役であるが、ドラマのプロットを良い意味で破壊するアクティビティなキャラクターは視聴率でも貢献している。実は、『竜馬がゆく』の前年に『三姉妹』(1967年)で中村敦夫氏が演じており、国民の求める龍馬像を試行したとも言われている。現在、様々な英雄・ヒーロー意識調査のトップクラスを維持する坂本龍馬は、原作はもちろん、同局の演出・配役によってヒーローとなった訳である。

注目浴びる順番でいけば二人目は、明智光秀である。『太閤記』(1965年)では佐藤慶氏が悪役として演じた。転機は『国盗り物語』(1973年)で明智光秀が準主役のストーリーとなり、颯爽と近藤正臣氏が演じたことが爆発的な人気を呼んだ。主人公である織田信長の敵役でありながら、慈愛あふれる理性的な人物と描かれた。この美男子の悲運路線は、マイケル富岡氏(『信長』1992年)、村上弘明氏(『秀吉』1996年)、坂東三津五郎氏(『功名が辻』2006年)と受け継がれた。自由闊達な坂本龍馬とは全く違う忍耐強い『組織人』として登場する。そのため、サラリーマン層だけでなく、女性の支持も厚い。ただ光秀の解釈は様々で不気味なテロリストと描かれたこともある。『徳川家康』(1983年)の寺田農氏、『利家とまつ』(2002年)の萩原健一氏等で、これもまた光秀のある側面なのかもしれない。2020年、明智光秀にどのような性格づけがされるか興味深い。

三人目は、石田三成である。徳川家康に反旗を翻したため、江戸時代以降、悪役の汚名を着せられてきたが、大河ドラマでは上司に忠実な官僚的な武将として描かれている。初代は『太閤記』の石坂浩二氏である。石坂氏の知性的で聡明なイメージがその後の三成像の基盤となっている。そして、爆発的な人気を博したのは『黄金の日々』(1978年)の近藤正臣氏が演じた三成像。主役を支える高級官僚の活躍として準主役で登場している。その後、宅麻伸氏(『おんな太閤記』1981年)、鹿賀丈史氏(『徳川家康』1983年)、真田広之氏・子役は小栗旬氏(『秀吉』1996年)、原田龍二氏(『利家とまつ』2002年)、小栗旬氏(『天地人』2009年)とこれまた同様のエッセンスを継承する面々である。知的で実直である一方で、クールな側面も垣間見させる演出で、三成もまた揺るぎない人気を得ることになる。

特筆したいのは、近藤正臣氏が明智光秀と石田三成の両者を5年のインターバルを置いて演じ分けていることである。そして結果的に両者ともに国民的英雄に昇華させている点である。推察であるが、局側に両者の性格や人生観に共通点を見出し、同じ近藤氏が演じることで共通項・特性の継続、そして相違点の明示をはかったのかもしれない。

この3人の英雄の共通の宿命は非業の死を遂げていることである。子孫も悲運を纏っている。つまり歴史上の「成功者」ではない。日本人の半官半民だけでなく、「成功しなかったが何かを成し遂げた」「記録に残らないが記憶に鮮明に残る」という美的感覚の申し子なのかもしれない。

2. 大河ドラマ育成俳優

大河ドラマが開始された1963年は、映画産業全盛期の時代で五社協定という掟が存在した。石原裕次郎＝日活、三船敏郎＝東宝、高倉健＝東映等、メジャー映画会社の俳優の抱え込みであり、人気俳優が他社の映画やテレビに出演することは難しかった。唯一テレビ出演に制約がなく、国民的な支持を得られる大物は梨園にしかいなかったといっても過言ではない時代であった。そのため、第一回の『花の生涯』(1963年)では尾上松緑氏、第二回『赤穂浪士』(1964年)では長谷川和夫氏の歌舞伎俳優主演で、スタートダッシュをかけることになる。ただ局側も手を拱いているだけでなく、前者では松竹の佐田啓二氏(中井貴一氏の父親)、後者では新劇のスターの滝沢修氏を招聘している。

第三回『太閤記』(1965年)から新人俳優育成路線となる。緒形拳氏、高橋幸治氏、石坂浩二氏といった当時無名の若手俳優を主役陣に据える大胆なキャスティングである。逆に功を奏し平均視聴率も30%を安定的に維持する成功をおさめる。余談であるが、信長役の高橋氏の助命懇願で本能寺の変が晩秋にまで延期されるという事態を招く人気ぶりであった。第四回『源義経』(1966年)では歌舞伎界の若手俳優・尾上菊之助氏に戻るが、準主役の藤純子氏の出演、緒形拳氏の連続登用等、新人育成路線は継続される。

特に第七回『天と地と』(1969年)では、石坂浩二氏と高橋幸治氏をダブル主役に抜擢するが、この頃には両者とも人気俳優として成長されており、大河ドラマ黎明期の完成形と捉えている。『太閤記』の3名は、その後大河ドラマに度々重要な役柄で登場されており、作品の質向上だけでなく、視聴者に「大河の御馴染みの俳優」としての安心感を与えてくれている。

その後の第二期・新人育成路線として成功をおさめられたのは渡辺謙氏『独眼竜政宗』(1987年)と中井貴一氏『武田信玄』(1988年)である。両者とも大河ドラマが初の連続ドラマ主演という画期的な起用である。実はその前年までの3年間(1984-86年)、大河ドラマは明治時代以降の近現代史に焦点をあてて、「武将の出ないフラストレーション」が国民にあったと思われる。この2作は大ヒットとなった。ビデオリサーチ社の統計によると前者は平均視聴率39.9%(最高47.8%)、後者は同39.2%(最高49.2%)である。大河ドラマの視聴率トップ2の座を現在も保持している¹⁾。

日曜日のゴールデンタイムに新人を主役として抜擢することはリスクが伴う。人気でなければ

1年間低視聴率に喘ぐことになる。その反面、国民が支持すれば育成されていきブームを巻き起こす。大河ドラマ自体、英雄の成長を描くことが多いので、視聴者が新人俳優の成長を見守ることとオーバーラップするのかもしれない。日本型アイドル育成のロジックとも共通していて「応援&育成」意識が強くなるのかもしれない。両者とも、その後の大河ドラマの常連となっていく。

この5人以外の大河ドラマの常連俳優として特筆すべきは西田敏行氏である。

『新・平家物語』(1972年)の端役で初出演ののち、『国盗り物語』(1973年)や『花神』(1977年)ではやはり脇役であった。その後、大河ドラマの裏番組『西遊記』や『池中玄太80キロ』(日本テレビ系)のコミカルな演技でブレイクし、『おんな太閤記』(1981年)では豊臣秀吉役を演じ、準主役となる。続く『山河燃ゆ』(1984年)や『武田信玄』(1988年)でも重要な役回りを演じ、『翔ぶが如く』(1990年)では西郷隆盛役で初主演、その後『八代将軍吉宗』(1995年)や『葵徳川三代』(2000年)でも主演をしている。10年間で3回の主演は西田氏だけの快挙である。またその後『武蔵 MUSASHI』(2003年)、『功名が辻』(2006年)、『八重の桜』(2013年)、そして今年度の『西郷どん』(2018年)とコンスタントに出演が続いている。筆者が調べる限り、“最多出演者”でもある。

ただ彼の場合、局側が意図的に育てた俳優というよりも、徐々に役回りが大きくなっていった叩き上げの俳優でもある。そのような彼の努力と「立身出世」の様は視聴者の心に深く刻みこまれている。彼が団塊世代であることも、同世代の視聴者個々の人生と重ねて共感され、支持を広げていったのかもしれない。

3. 女性主役の作品

大河ドラマで女性主役の作品は、57作中13作品(20%強)である。

女性が初主役のものは第五作『三姉妹』(1967年)である。文字通り、岡田茉莉子氏、藤村志保氏、栗原小巻氏の3人が主役で幕末・明治期の波乱の生涯を描いた秀作である。ただ、どうしても政治史中心のプロットとなる歴史物では、男性を主役にしたものが続き、1979年の『草燃える』(岩下志麻氏主演)まで12年間かかることになる。この作品を契機に政治のトップではなくても時代を切り拓いた女性を描く路線も新しく引かれることになる。1981年『おんな太閤記』佐久間良子氏、1985年『春の波濤』松坂慶子氏、1986年『いのち』三田佳子氏、1989年『春日局』大原麗子氏、1994年『花の乱』で再び三田佳子氏と繋がる。映画、舞台で一枚看板として活躍する大女優を据える万全の布陣である。全てが格調高く力強い作品に仕上がっている。女性管理職が増加する社会情勢とも連鎖されていて、主演女優の好感度は各種調査のトップをしめていた。

その後13年間、女性の主役がない時代が続いた。『太閤記』のリバイバル作品の『秀吉』(1996年/竹中直人氏主演)が平均視聴率30%を超えることになり、男性一代記路線に舵を切ったと推察している。ただ徐々にその路線も陰りを見せて、『徳川慶喜』(1998年/本木雅弘氏主演)や『北条時宗』(2001年/和泉元弥氏主演)等の史実に忠実な傑作が続いたものの、視聴率的には苦戦、後者は10%

台まで低迷してしまう。

そこで、翌年の2002年『利家とまつ～加賀百万石物語～』を松嶋菜々子氏と唐沢寿明氏の夫婦主演で起死回生をはかることになる。夫婦愛、家族愛を基軸とした明朗快活な展開は、老若男女に受け入れられ高視聴率（平均22%）をとることになる。その後、この夫婦ダブル主演は2006年の『功名が辻』仲間由紀恵氏・上川隆也氏主演へと引き継がれた。

この2作品で柱となったホームドラマ調のコンセプトは、その後の女性主役の大河ドラマに引き継がれていく。松嶋氏、仲間氏の成功で若者に人気の有る民放ドラマの主演女優がその後続くことになる。重厚さの時代から、庶民派の時代へ続くことになる。

そして、2008年の『篤姫』（宮崎あおい氏主演）、2011年の『江～姫たちの戦国～』（上野樹里氏主演）はホームドラマのエッセンスを残しながらも政治に翻弄される女性を大きなスケールで描かれた。

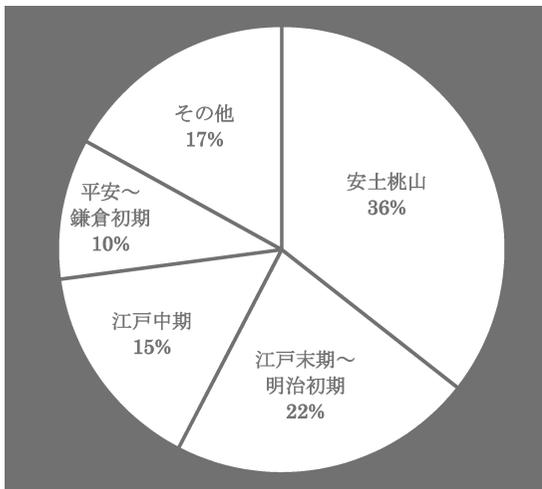
その一方、庶民史となったのが2013年『八重の桜』（綾瀬はるか氏主演）と2015年『花燃ゆ』（井上真央氏主演）である。幕末作品は荒唐無稽のものになることが多いが、無名女性の一代記というアレンジは、作品に文字通り「華」を添えるだけでなく、結末の分からないことが期待できるものになる。また女性主役の場合、食卓・食事場面の頻度が増す傾向にあるが、この二作品とも当時の生活事情を如実に表現していたことも価値の高い作品と言える。そして2017年『おんな城主直虎』（柴咲コウ氏）と続く。女性主役の作品は、まだまだ割合的には少ないものの、2-3年周期に短縮されてきており、しかも無名女性で番組的に成功していることから、潜在的な可能性はかなり大きいと思われる。

主役ではないが大物女優が演じているのが「お市の方」と「淀君」である。主な女優として前者は、初代岸恵子氏（『太閤記』）から、松原智恵子氏、夏目雅子氏、大地真央氏、鈴木保奈美氏、後者は、初代三田佳子氏（『太閤記』）から、池上季美子氏、夏目雅子氏、松たか子氏、宮沢リエ氏、二階堂ふみ氏となっている。この母娘の配役によるコントラストは作品により深い相関関係を醸し出し、重要なプロットとなっている。

4. 設定時代

(1) 分類方法

大河ドラマの背景となる時代を、設定時代として整理するために、数値的根拠として作品ごとの放送回数（約50回）の描写回数、活躍した時期、政治的に権力を持った時期などの指標を用いた。その結果、時代区分を「平安～鎌倉初期」、「安土桃山時代」、「江戸初期」「江戸中期」「江戸末期～明治初期」等に分類を行なった。分類や判断基軸とするうえで、難解だったことが二つある。一つが、二つの時代に跨っている作品が多かったことである。『宮本武蔵』『春の波濤』『二つの祖国』等が挙げられる。二点目は主人公が為政者でない点である。これらは原作・脚本が描きたかったテーマ（例えば、主人公の生き様に影響を与える人生観や価値基準）がどの時代を象徴するものかを筆者なりに分析して分類した。



図表1 設定時代

(2) 分類結果

大河ドラマの設定された時代を分類した結果は【安土桃山時代】が3分1を超える番組数でトップである(図表1)。いわゆる戦国物。初期の娯楽軍記的描写の『太閤記』や『国盗り物語』、地方の英雄を壮大に描いた『独眼竜政宗』や『武田信玄』、ホームドラマ調の『秀吉』、『利家とまつ』や『功名が辻』等、高視聴率をとったものが多い。戦国時代独特のグローバルでクリエイティブな時代背景がある。また、大河ドラマの“常連英雄”である織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三傑が登場することが何よりも大きい。この三傑の性格設定

や台詞回しなど毎回その時代背景を代弁したものになっている。流行語にもノミネートされたものは、バブル崩壊後の『秀吉』の台詞「心配ご無用！」や、『利家とまつ』の信長の台詞「であるか…」は肩身の狭くなってきた上司の忍耐の心情の代弁とも捉える。この三傑との絡みがあることで、直虎や江といった馴染みの薄い女性主人公にも感情移入できるようになる。また、明智光秀、石田三成、お市母娘なども必ず登場して大まかな結末を予想できる安心感がある。見方を変えれば、出来レースにも思えるが、番組ごとにキャラクター設定を変える工夫をされている。『信長』の時は、徳川家康に郷ひろみ氏、秀吉に仲村トオル氏を配してこれまでのイメージを覆した。この安土桃山時代は、大半の作品が20%を超える最も視聴者人気の高い時代である。

【江戸末期～明治初期】いわゆる幕末物であるが、視聴率は概して低く大半が20%に満たない。ただ毎回各方面からの評価は高く、男性視聴者の絶大な支持がある。一つは『群像劇』という演出手法があげられる。主人公が震むほどキャラクターの際立った者が多数登場する。合戦場面の多い戦国物と比べて、暗殺や派閥・藩閥といった陰湿なテーマに覆われているが、一人一人の心理描写が詳細に表現されている。また根底にある「志」や「絆」といったものも好かれる要因である。『花神』以降、組織論、人間学として描かれることが多く、サラリーマンの共感を得ている。個人的には「サザエさん現象」で憂鬱になった日曜夜間の気分を奮い立たせる効果があるとも仮説だてている。男性サラリーマンの最も好きな偉人が「坂本龍馬」で何十年も揺るがないことをみてもこの時代で企画する意義を感じる。

【江戸中期】『赤穂浪士』、『元禄太平記』や『元禄繚乱』等、赤穂のあだ討ちを主軸に据えているものが多い。文化隆盛の時代で戦や暗殺等がなく子どもも安心して観られるテーマ設定のものが多い。10年強の周期で放映されるが、その時代背景を映すために経済学的な観点から日常生活を解説するような場面も多い。

【平安～鎌倉初期】いわゆる源平合戦物がメインである。源氏側から描いた『源義経』、『草燃える』、『義経』や、平家総帥を主人公にした『新・平家物語』、『平清盛』がある。地方版スピンアウトとしては『風と雲と虹と』や『炎立つ』もこの時代である。敵味方同士の情や関係も詳細に描かれている。特に、平清盛が頼朝・義経兄弟の命を取らなかったというインシデントは本能寺の変や関が原合戦と並ぶ、日本史のターニングポイントの一つである。その描き方が作品によっても違うことは興味深いとともに、ドラマを通して視聴者に「武士道」や「情のある倫理観」を教授しているのかもしれない。

【その他】室町時代が中心の『太平記』、『花の乱』、鎌倉時代の『北条時宗』等が上げられる。特筆したいのが1984年からの近代史の3作品である。日系アメリカ人家族の物語である『山河燃ゆ』（1984年/松本幸四郎主演）、川上貞奴の人生を描いた『春の波濤』（1985年/松坂慶子主演）は明治から大正時代、女医の活躍を描いた『いのち』（1986年/三田佳子主演）の3作品は、政治史から庶民の生活史に舵を切った秀作である。視聴率も20-30%を維持していたので成功作品と言えるが、時代物を希求する視聴者はこの流れが継続することをよしとしなかった。続く『独眼竜政宗』や『武田信玄』のスーパーヒットによってこの3年間の試行は水泡となった。

2019年の大河ドラマ『いだてん』は33年ぶりの近現代史となり、1964年の東京オリンピックまでの50年を描くとのことである。この作品に続く近現代史の企画がこれから登場することも期待される。

5. 課題と展望

社会学系の研究ノートということで大胆な課題設定や提言をしたい。

第一に「主人公」である。これまで述べてきた大河ドラマのロジックでは「坂本龍馬」の再登場や、「明智光秀」の主演抜擢は、ある程度予想ができた。そのロジックでは「石田三成」が次期主人公と割り出せる。そう遠くない時代に、社会的人気とこれまでの“貢献”も加味して育成キャラクター・石田三成の出番ではないかと推察している。お市の方と淀君の母娘も主軸となりうるが、『江』の放映で少し先になったかもしれない。

また別のNHKロジックが存在すると思われる。朝のテレビ小説では全国制覇したように、大河ドラマでもご当地が各地を巡っている。唯一ご当地として踏破されていないのが北海道である。確かに知名度の高い英雄がいない。土方歳三や榎本武揚も短期滞在である。私見であるが『琉球の風』（1993年/東山紀之主演）で架空の主人公で沖縄を舞台にした手法で、開拓民の生活史などは難しいだろうか。唯一の有名人・クラーク博士等と絡ませてみるのもおもしろいかもしれない。北海道作品も待たれるところである。

筆者がここ2年間で調査した大河ドラマに関する各種の結果を紹介する。介護の講演後などに、聴衆である大阪府内の高齢者の方に協力してもらった集合調査法の結果である（2016年9月「介護保険と介護予防」対象256名。回収率100%/2017年3月「高齢者虐待防止」対象304名。回収率

51%)。今後主役を期待する人物は「聖徳太子」がトップであった。確かに日本人の聖人君子のモデルでもある。時代的にも空白の奈良・飛鳥時代に遡ることになるものの、資料が十分にない点や天皇の血縁者としての言動(台詞)に細心の注意が払われなければならない。同局がスペシャルドラマとして本木雅弘氏主演で一度映像化したのが、祭司的、幻想的場面が多く、言動の制約の厳しさを実感した。第二位は「菅原道真」。天神様という信仰対象の神をどのように表現していくか興味深い、こちらも根拠資料や制約が色々と阻むかもしれない。第三位は「楠正成」。さすが関西の地元スターと思うのと同時に、家族愛も十分に包可能でホームドラマ路線にも乗れる。その他、絶対難しいと思われる卑弥呼等の古代に活躍された偉人も上位に食い込んでくる。

第二に「描く歴史の種類」である。これまで近現代史の3作品を除き、大半が「政治史」として製作されてきている。確かに政治史関連のヒット小説は多く原作には困らないし、確実に視聴率はとれる。ただ、政治史だけが歴史であろうか。国家を作り、維持するという方法論と、日々頑張つて社会を作るという方法論の両輪で国は成立している。後者は無名の人間が多く映像化にそぐわないかも知れないが庶民史、社会史に踏み込むことがあってもよい。その他、文化史がないことも残念である。例えば、松尾芭蕉、千利休といった活動資料のたくさん残っている文化人へも焦点を当てるなども考えられる。もちろん、夏目漱石などの小説家や松下幸之助などの企業家なども十分に長期間放映できると考えている。映画にもなっている空海、法然、親鸞、道元、日蓮等の宗祖も1年間耐えられる逸話の持ち主で、戦乱や疫病、貧困、天災等を庶民の視点で完璧に描ける可能性がある。ただ伝説的部分が多い逸話や神格化された存在であること、そして公共電波で特定宗派のみに光を当てることが許されないのかもしれない。

第三として人物の相関関係についてである。あくまでフィクションのドラマであるため、主人公の交友関係に目くじらを立てても大人気ないと思うが、史実をねじ曲げるような設定はいかがなものかと考える。

例えば『秀吉』では、豊臣秀吉と石川五右衛門が兄弟のように育った設定であったり、『新撰組!』では、近藤勇と坂本龍馬がじゃれあったり、『西郷どん』では西郷隆盛と徳川慶喜が飲み友達のように描かれている。これでは背景因子が破壊されて「対決」の心理描写が軽薄なものになる。小学生等まだ歴史に詳しくない視聴者がテキストのように観る番組だけに、基軸に据える人物同士の相関関係の脚色には注意を払う方がよい。

次に架空人物の設定である。主役、脇役に数々登場する。これも展開を複雑にしてしまう。これまで主役が架空人物だった作品は4作品ある。偉人伝として英雄、英傑の一代記を期待する視聴者にとってはこの手法は好まれないこともある。視聴率も低いと仮定していたが、実は高視聴率作品が多い¹⁾。

具体的には『獅子の時代』(1980年/菅原文太氏)が平均21.0%、『山河燃ゆ』(1984年/松本白鷗氏)もほぼ同じく平均21.1%を超えている。沖縄を舞台にした『琉球の風』(1993年/東山紀之氏)は裏番組の人気で平均17.3%苦戦したが、『おしん』的な要素の多い『いのち』(1986年/三田佳子氏)は

平均29.3%至っている¹⁾。

今回、この4作品をサンプリング視聴をしてみた。共通点としては「ストーリー展開が予想出来ない」「主人公の台詞や感情表現が分かりやすい」という2点である。ドラマ視聴としての満足度は非常に高いと考えられる。ドラマは史実に忠実にあればあるほど当然「予定調和」の展開にならざるをえない。しかしながら、架空の人物が主人公の場合はグローバルに設定出来る。また、奇想天外な言動も許容される訳である。4作品とも文字通りドラマチックである。この作品群を大河ドラマの例外群として設定してみると、逆に他の作品の脚本・演出の「制約」が証明できる。換言すればストーリー展開上の「阻害因子」(厳格な時代考証/実在人物への配慮等)が大河ドラマを支配していることが分かるロジックになる。そう考えると人物の相関関係も許容すべき側面、いや展開の活性化剤として必要性があるのかもしれない。家庭では「ここはフィクションなんだよ」と指摘することも、親の権威向上に繋がるかもしれない。

最後に付記したいのが「放送期間」である。図表2でも分かるとおり、半年放映の『琉球の風』以外、全て1年間放映されている。じっくり視聴できるが、全体ストーリーの間延び感は否めない。1年間続くと、どうしても1人の主人公ではもたず「群像ドラマ」になりがちで、知名度の高い英雄が多く出演する「安土・桃山時代」や「江戸後期・明治初期」の作品が増えてしまう。また、生活の多様化にともなって1年間継続視聴は難しくなっているかもしれない。歴史物は途中から視聴しにくいということも留意しなければならない。半年という期間も再考されてはどうかと考える。

おわりに

大河ドラマにおいて、自国の歴史を60年近くにわたって放映してきたNHKには敬服するばかりである。スポンサーの意向を鑑みる必要がない反面、全国民の満足度を勘案し続けなければならない責任下での製作も大変だと推察できる。

また、国民へのメッセージも主人公を通して発信されている。これも同局らしい。

老若男女、家族全員で視聴できる大河ドラマは、ある者には教科書となり、ある者には人生のアドバイスの役割を果たしている。「人物」を描きながら、実はその当時の「時代」と「社会」を紹介する役割も担っていて、現代を生きる視聴者はタイムスリップしながら主観、客観両方の思考で展開を見守っている。

それゆえ、社会学の資料、教材としても貴重なものである。まさに大河ドラマは日本の代表的番組であると同時に、番組自体が新たな「歴史」を国民とともに創造していると考えている。

図表2 歴代大河ドラマのタイトルと主演俳優（主人公）

	タイトル	主演俳優（主人公）
1963	花の生涯	尾上松緑（井伊直弼）
1964	赤穂浪士	長谷川一夫（大石内蔵助）
1965	太閤記	緒形拳（豊臣秀吉）
1966	源義経	尾上菊之助（源義経）
1967	三姉妹	岡田茉莉子（おむら）
1968	竜馬がゆく	北大路欣也（坂本竜馬）
1969	天と地と	石坂浩二（上杉謙信）
1970	樅の木は残った	平幹二郎（原田甲斐）
1971	春の坂道	萬屋錦之助（柳生宗矩）
1972	新・平家物語	仲代達矢（平清盛）
1973	国盗り物語	平幹二郎（齋藤道三）
1974	勝海舟	松方弘樹（勝海舟） 渡哲也 途中降板
1975	元禄太平記	石坂浩二（柳沢吉保）
1976	風と雲と虹と	加藤剛（平将門）
1977	花神	中村梅之助（大村益次郎）
1978	黄金の日日	現・松本白鷗（呂宋助左衛門）
1979	草燃える	岩下志麻（北条政子）
1980	獅子の時代	菅原文太（架空の人物）※
1981	おんな太閤記	佐久間良子（ねね）
1982	峠の群像	緒形拳（大石内蔵助）
1983	徳川家康	滝田栄（徳川家康）
1984	山河燃ゆ	現・松本白鷗（架空の人物）※
1985	春の波濤	松坂慶子（川上貞奴）
1986	いのち	三田佳子（架空の人物）※
1987	独眼竜政宗	渡辺謙（伊達政宗）
1988	武田信玄	中井貴一（武田信玄）
1989	春日局	大原麗子（春日局）
1990	翔ぶが如く	西田敏行（西郷隆盛）
1991	太平記	真田広之（足利尊氏）
1992	信長	緒形直人（織田信長）
1993	琉球の風	東山紀之（架空の人物）※
1993	炎立つ	渡辺謙（藤原経清・泰衡）
1994	花の乱	三田佳子（日野富子）
1995	八代将軍吉宗	西田敏行（徳川吉宗）
1996	秀吉	竹中直人（豊臣秀吉）
1997	毛利元就	中村橋之助（毛利元就）
1998	徳川慶喜	本木雅弘（徳川慶喜）

1999	元禄繚乱	中村勘九郎 (大石内蔵助)
2000	葵 徳川三代	西田敏行 (徳川秀忠)
2001	北条時宗	和泉元彌 (北条時宗)
2002	利家とまつ	唐沢寿明 (前田利家) 松嶋菜々子 (前田まつ)
2003	武蔵 MUSASHI	市川新之助 (宮本武蔵)
2004	新選組!	香取慎吾 (近藤勇)
2005	義経	滝沢秀明 (源義経)
2006	功名が辻	仲間由紀恵 (山内千代) 上川隆也 (山内一豊)
2007	風林火山	内野聖陽 (山本勘助)
2008	篤姫	宮崎あおい (篤姫)
2009	天地人	妻夫木聡 (直江兼続)
2010	龍馬伝	福山雅治 (坂本龍馬)
2011	江 ~姫たちの戦国~	上野樹里 (江)
2012	平清盛	松山ケンイチ (平清盛)
2013	八重の桜	綾瀬はるか (新島八重)
2014	軍師官兵衛	岡田准一 (黒田官兵衛)
2015	花燃ゆ	井上真央 (杉文)
2016	真田丸	堺雅人 (真田幸村)
2017	おんな城主 直虎	柴咲コウ (井伊直虎)
2018	西郷どん	鈴木亮平 (西郷隆盛)
2019	いだてん	中村勘九郎 (金栗四三)
2020	麒麟が来る	長谷川博己 (明智光秀)

※は架空人物

引用文献

1) 『NHK大河ドラマ50作パーフェクトガイド』(NHKサービスセンター)2010年, p106-107

参考文献

『NHK大河ドラマ大全』(NHK出版)2010年.

『大河ドラマ一覧 / NHK オンライン』

<https://www.nhk.or.jp/segodon/taiga/> (参照2018-11-30)

『テレビガイド』(東京ニュース通信社)1980年~2018年.

(まえだ たかひろ : 教授)

